高地性集落の役割

弥生時代には、大きな集落と小さな集落、平野にある集落と山や丘にある集落など、さまざまな集落がありました。

これらの中で、近畿地方では、数百人が住む大規模な集落に地域のリーダーがいました。そして、そのリーダーが共同の労働を指揮し、他地域のリーダーともつき合って、さまざまな品物や情報を手に入れていました。大規模集落では、石器や木器の製作はもちろんのこと、銅鐸や銅剣などの青銅器も生産していました。

これら大規模の集落で生産された特産品は、遠い地域まで流通していました。近畿地方では、北部九州や中国大陸、朝鮮半島で作られた品物が出土していることから、弥生時代には長距離の交易が行われていたことがわかります。

一方、高地性集落は、見晴らしが良く、人や物の動きを見張るには絶好の場所です。高地性集落では、ノロシをあげることによって、重要な情報を周辺の村や人びとに伝えていたのかもしれません。会下山遺跡は、このような監視と情報の発信・伝達の役割を果たすことで、青銅製漢式三翼鏃や鉄器、ガラス小玉のような貴重な品々を、見返り品として平野の集落から入手していたのかもしれせん。

全国各地の高地性集落

全国で発掘された高地性集落を見ると、そこに住む人びとは山の中に閉じこもって自給自足の生活をしていたのではなく、他の村と盛んに交流していたようです。鏡や鉄器をはじめ、当時の最も先進的な品物をいち早く入手し、朱など稀少な顔料の生産活動にも関心を向けています。会下山遺跡から見つかった青銅製漢式三翼鏃は、中国大陸からもたらされたものです。

現在、約700ヶ所の高地性遺跡が見つかっています。これらのうち会下山遺跡のように、住居跡が見つかっている高地性集落跡は200ヶ所ぐらいで、集落の構造がわかっているものは数十ヶ所を数えるにすぎません。中心となる時期は全国一律ではなく、大きく分けると、弥生時代中期後半（紀元前

主な高地性集落跡の分布（田中琢『倭人争乱』集英社 1991 年刊から）

西日本の主な高地性集落の分布を示した図です。会下山遺跡も高地性集落を代表する遺跡として取り上げられています。

１～２世紀）、後期前半（紀元１世紀）、後期後半（紀元２世紀）、古墳時代前期初頭（紀元３世紀初頭）のそれぞれにピークをもつ地域があります。高地性集落の役割や性格については、見張り場、逃げ城、公会・交易、大規模集住、畑作農耕、交通拠点、祭場など、さまざまな説があります。

瀬戸内海一円では、弥生時代中期後半（紀元前１～２世紀）に盛んに営まれ、漁撈・製塩・貝採集などの活動が盛んな集落もたくさん見つかっています。表六甲・生駒西麓・淀川右岸・大和・和泉・紀伊北部・山城南部などでは後期前半（紀元１世紀）にピークがあり、淀川左岸・木津川流域・山陰や北陸では後期後半（紀元２世紀）のものが増加し、北限の越後では古墳時代前期初頭（紀元３世紀初頭）まで下るものが認められます。こうした分布状況には、社会における緊張関係が時間的に推移し、地理的に移動していくように見えます。高地性集落と入れ替わるように古墳が築造される地域もあって、社会の変化を考えると興味が尽きません。

会下山遺跡は、弥生時代中期後半から後期前半（紀元前２世紀～紀元１世紀）まで継続しており、見張り場、逃げ城、公会・交易、大規模集住、交通拠点、祭場など、さまざまな性格や役割をあわせ持っていたのではないかと考えることができます。

会下山遺跡は今から2000年ほど前の遺跡ですが、この頃、世界では一体どのようなことが起こっていたのでしょうか。

弥生時代中期の後半、この山の上で集落の開発が始まった紀元前２世紀頃、中国では前漢帝国が最盛期を迎え、７代皇帝の武帝が登場し、紀元前129年に北方の匈奴を討伐します。ローマでは、マケドニア戦争やポエニ戦争が起こっています。エジプトでは、プトレマイオス朝エジプト王国がアレクサンドリアに都し、紀元前196年にはヒエログリフ・デモティック・ギリシア文字が併刻された法令ロゼッタ・ストーンが誕生しています。インドでは紀元前180年にマウリア朝が崩壊。紀元１世紀には、アジャンター石窟寺院が開かれています。

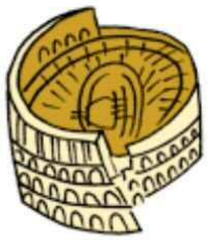
会下山遺跡が消滅する弥生時代後期の中頃（紀元１世紀頃）は、ローマ帝国で五賢帝時代が始まる頃（紀元96年）に当たります。ベスビオ火山の噴火でイタリアの町、ポンペイが滅びたのは紀元79年です。翌年にコロッセウムが完成したこともよく知られています。

『魏志』倭人伝や『後漢書』東夷伝などの中国の歴史書には、紀元２世紀後半頃に日本列島で起こった倭国大乱の記載が見えますが、これは紀元１世紀頃の会下山遺跡の消滅より後の出来事だということがわかります。つまり、会下山遺跡と倭国大乱は、直接には関係ないと言うことができます。

こうして世界の歴史を見わたすと、有名な人物が次々と会下山遺跡の営まれた時代に登場しています。『ガリア戦記』を表したカエサル（紀元前100年～紀元前44年）、絶世の美女といわれたクレオパトラ（紀元前69年～紀元前30年）、中国初の通史『史記』を記した司馬遷（紀元前145年～没年不明）、最大版図をめざしたローマのトラヤヌス皇帝（紀元53年～117年）等々。

当時の日本は倭と呼ばれ、北部九州にあった奴国の王が紀元57年に後漢の洛陽に使者を送り、光武帝より「漢委奴国王」と刻まれた金印を授かっています。

このような時代に、会下山遺跡で人々は暮らしていたのです。



会下山遺跡の主なできごと

昭和13年　阪神大水害によって会下山で土砂が流出し、弥生土器が多数出土

昭和29年　市立山手中学校が、会下山に植物実習園をつくるために生徒たちが山道を切り開いていたところ、弥生土器の破片を発見（２月23日）

昭和31年　第１次調査を実施（３月21日から１週間）

昭和33年　第２次調査を実施（７月29日から15日間）

昭和34年　第３次調査を実施（８月４日～８月25日）
第４次調査①を実施（12月17日～12月29日）

昭和35年　兵庫県史跡第１号に指定される（５月12日）
第４次調査②を実施（８月15日～８月31日）

昭和36年　第５次調査を実施（７月20日～８月５日）
芦屋市が遺跡保存工事に着手し、竪穴住居と高床倉庫を復元し、歴史教材園として整備。

昭和38年　市民会館内に郷土資料室と資料展示ホールを開設し、会下山遺跡の出土品を展示・保管する（10月）

昭和39年　発掘調査報告書『会下山遺跡』を刊行（3月31日）

昭和48年　第６次調査を実施（７月１日～７月６日、10月１日）

昭和51年　芦屋ライオンズクラブが清掃奉仕活動を開始

昭和56年　復元竪穴住居が焼失し、検証発掘（12月15日）

昭和63年　復元高床倉庫の建て替え、解説板などの新設、遊歩道の再整備

平成14年　第７次調査を兵庫県教育委員会が実施（７月１日～７月３日）

平成19年　青銅製漢式三翼鏃を市指定文化財に指定する（３月２日）

平成20年　第８次調査を実施（３月３日～３月21日）

平成21年　第９次調査（２月９日～３月４日）、第10次調査（８月31日～12月16日）を実施
地形測量を開始（８月31日～、平成23年度まで実施）
第10次調査の現地見学会を開催（10月31日）

平成23年　国指定史跡に指定（２月７日）

昭和30年代の発掘調査

復元竪穴住居（昭和56年に焼失）

清掃奉仕活動後の学習会

第10次調査の現地見学会

市内小学校の校外学習

アクセス

阪急芦屋川駅から北西方向に徒歩20分のところに会下山遺跡入り口（芦屋市聖苑入り口のすぐ東側。下の写真参照）。入り口から登山道を徒歩約8分で会下山遺跡に到着します。

会下山遺跡の入り口

会下山遺跡までの登山道

編集・発行

芦屋市教育委員会社会教育部生涯学習課

〒659-8501　兵庫県芦屋市精道町 7−6　電話　0797−38−2115　FAX　0797−38−2072

平成24年3月31日 第1刷発行
平成26年3月31日 第2刷発行
平成29年3月31日 第3刷発行